

子どもの頃 時々おなかいを起

こしていた。そのとき必ず父母が夜眠らないでかわるがわるおなかをやさしくさすってくれる。医師でもない父母は、心の中で無力さを知りながら、痛みを分け合うために、寄り添いやさしく触れる手のぬくもり。母の手は、やさしくさすってくれたなあ、父の手は大きく硬くすこし力サカサしていたなあ。そのときの感覚、感触はいつまでも記憶に残っています。

今、よく使われている『ケア』と

いうことば。このケアとは「世話をする」という意味だそうです。英語では「嘆き悲しむ」こと、つまり私の父母はともに悲しんでくれていたのです。何もできないが、ただいっしょに痛みを感じてくれていた、痛みを共有してくれていたのです。ケアをする人もされる人も共有し、心が一つに重なり深夜を過ごしたのです。

いつの間にか、ねむってしまい目がさめたら朝になっていました。父母は何事も無かったかのように、いつものように朝を迎え仕事をしていたのです。「おはようございます。」と起きると、心配そうに「おなかの具合は？」と聞いてくれる。「治った。」という、ホッとした声で「ああ、よかったなあ。」とことばを返してくれる。そして、一日がまた始まるのです。

このような苦しみや悲しみをたくさん経験することで、自分自身の経験を土台に相手の心の奥深くまで分け入り、聴き取ることができるようになるのではないのでしょうか。

よいケアができる人は、まずよい聴き手でもあると思うのですが。

さて、 自分自身の子育てはどのようであったか振り返ってみると、両親がしてくれたことを我が子にお返しできたか？と。今の気持ちには、ただ只反省のみです。

自分が子育て中、赤ちゃんのときから小学校低学年まで、途中大きな病気をし

子どもを育てる ということ

～人生60年を迎えて思うこと～

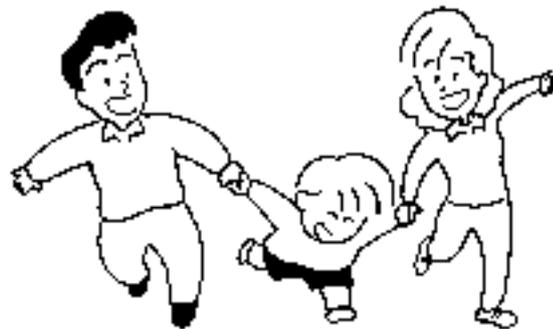
教育相談員 楠本弘子

ながら夢中で突っ走ってきました。勤めが学校ということでした。たくさんの子どものちや保護者の方たちと接することで、教えられることが多くありました。自分も親になり、毎日の生活が精一杯でした。どの親も自分の子どもをじっくりみるゆとりがない時期でもあるように思います。毎朝、目が覚めた途端、体が自然に動き、次々と朝の行事をこなして、息つくまもなく昼、夜と過ぎて一年がアツという間に過ぎてしまいます。次の季節にな

り子どもの服が小さくなっていくのに気がつき、びっくりという始末です。

子どもは目には見えないけれど、毎日毎日、心も体も成長しているのだと、そのとき初めて実感するのです。

そんなことを 何回となく繰り返した、いつのまにか成長して成人になっていたと。変わっていないのは親だけだと思えました。



ある日のこと、二人のお子さん

を育てているお母さんから「上の女の子と、どついても話をすることができない。」という話を聞きました。抱きしめてあげようと思っても、対等な口をきかれると、つい、にくらしくなったりして、話が出

来ないそうです。下の男の子は正直なところ何をやってもかわいくてベトベトの手で抱きついて、話も自然に出来るのに…。自分は母親として失格かもしれないと悩んでいました。

毎日 ずっといっしょにいる中で、

子育て中の人なら誰でも「まったくもう！」

という瞬間が、無数にあると思います。自分のことも含めて考えてみると、我が子の自分の思っているようにならないとき、「何で私がこんな思いをしなきゃならないの！」となってしまう。こんな気持ちになるときは、たいてい大人同士の関係でうまくいっていないことがあるように思うのです。

自分が認められていない、誰も味方がいないと感じるとき、わたしたちはほんの小さなことが引き金となって、たとえ子どもに多少の言い訳があつたとしても受け入れられず、怒鳴ったり大声を出してしまうのではないのでしょうか。

子どもにあたるのではなく大人同士認めあえる人間関係をつくるころができればいいと思います。

家族に、友達に、子育てやほかの話どんなことでもいい、おしゃべりして自分の思いを出しあう時や場所(昔の井戸端会議のようなところ)を築いていけることを願っています。

このようなところをたくさん作り、自分の子どもだけでなく他の子どももいっしょに育つ、しっかりと環境を作り、「元気な子どもを世に送りたい」と、60歳を迎えてつくづく思います。

どんな子どももみんな未来を担う大切な宝物なのですから。